



通信

NPO法人民謡民舞公演実行委員会

第 4 号

発行 2023/4/20

発行NPO法人民謡民舞公演実行委員会
発行人編集人

三宅良二

〒267-0053
千葉市緑区高津戸町
309-44-305

☎043-310-6175

「津軽民謡新春公演」 第百回記念公演を開催

令和五年一月の公演で三十二年目を迎え、四日の公演が百回目となった「津軽民謡新春公演」が、一月二日三日四日、浅草木馬亭で開催されました。平成三年一月二日に始まった「津軽民謡新春公演」。きっかけは浅利みき先生と成田武士先生の間で、浅利先生「成田さん、正月田舎さ戻るの？」成田先生「なも戻らねよ」浅利先生「ふーん、へば、ただ東京さいるだな。オラ達、唄ってねば、ただの人だ」というような会話があり、成田先生が浅利先生の言葉に感銘を受け、この「津軽民謡新春公演」が始まりました。浅利先生が、「正月なのに故郷に帰れない人が東京にはたくさんいる。そういう人達に、わずかでも懐かしいな、と思ってもらえれば。みんなで売ったチケット代がギャラだからギャラが千円かも知れないよ、それでもいいじゃない、やるべしっていう人達が集まればいいんだよ。おめ、やるだばわもやるよ」って話されていた事、今でも鮮明に覚えてます。と、



すぐそばで聞かれていた成田武士先生のお弟子さんの、成田恵美子さんからお伺いしました。

平成二十年に浅利みき先生が、平成二十六年十月十八日には成田武士先生が逝去され、翌年の公演は、成田会の皆様や成田先生と親しかつた江川春雄さん、渋谷修さんが中心になられて開催されました。同年十一月上尾駅の近くのホテルでの一週忌の帰りに、お嬢様の成田育子さんから正月公演について、会場は申し込みしてあるのでやってくれないかと、との相談があり、早速、師匠の工藤武先生に「青森民謡協会で作るべきでは」と思い、相談したところ、出演者の大半が青民の会員以外の方ということや、数年前から進行表の作成等を任せて頂いていたこともあり「おまえ、やれ」と言われ、翌年から私の方で皆様と相談しながら主催させて頂くようになり、一昨年NPO法人設立を機に、その法人で主催することになりました。私自身で平成十九年から参加させて頂き、間近で先輩方の舞台に接し、多くの事を学ばせて頂きました。

現在の公演は、始められた当初とは、趣が変わり出演者も日替わりになりましたが、津軽民謡に対する想いは同じです。第一回から唯一、毎年出演されています大先輩、白戸久雄先生から「いい人に引き継いでもらったな」と言って頂き、励みになりました。

これから津軽民謡を愛するお客様や出演者に、喜ばれるような公演になるよう心掛けでいきたいと思ひます。





民謡雑感(1)

小沢千月

私はこの三月で八十七歳になりました。過去、私の夢を追いかけて、老人は、過私の夢を追いかけて、老人は、懐かしむ事が多くなり、俺も歳をとった。なアーと思うこの頃です。特に、稽古場を兼ねた拙宅が、道路拡張計画により、移転を迫られている。現状で、道具をどうしていいか、と悩む。日々、この際、どんす。かと思ひ、から、この際、どんす。かと思ひ、と知り、一つ、いざ、目をやり、手を取って、みる。と、一つ、いざ、目をやり、手を取って、蘇る。と、一つ、いざ、目をやり、手を取って、え、て、くる。訳です。い、あ、の、頃、の、思、い、出、が、な、物、に、三、枚、の、木、挽、き、鋸、が、あ、り、し、て、い、る、道、具、の、中、に、三、枚、の、木、挽、き、鋸、が、あ、り、し、て、い、る、道、具、十、七、枚、の、木、挽、き、鋸、が、あ、り、し、て、い、る、道、具、二、枚、の、木、挽、き、鋸、が、あ、り、し、て、い、る、道、具、太、平、洋、行、の、祖、父、と、武、器、に、使、つ、た、物、で、す。で、鉄、物、は、す、べ、て、供、出、と、云、う、指、示、で、し、た、が、父、親、は、一、こ、ん、な、物、で、今、か、ら、鉄、砲、な、ん、ぞ、作、る、よ、う、じ、ゃ、日、本、は、負、け、る、と、云、つ、て、供、出、を、拒、み、ま、し、た。日、本、は、負、け、る、と、云、つ、て、川、材、と、呼、ば、れ、た、飯、能、地、方、の、杉、桧、は、復、興、の、た、め、に、需、要、最、盛、期、を、迎、え、製、材、工、場、だ、け、で、は、間、に、合、わ、ず、木、挽、き、鋸、も、大、に、押、さ、れ、鋸、も、ま、し、た、が、吊、る、さ、れ、た、ま、ま、と、な、り、ま、し、た。物、置、の、壁、に、出、会、い、ふ、ま、ま、と、な、り、ま、し、た。一、私、が、民、謡、と、唄、え、る、が、久、さ、ん、の、親、父、に、聞、く、と、俺、も、唄、え、る、事、で、親、父、の、仕、事、仲、間、の、森、田、



久造さんを訪ねて木挽唄を教えて欲しいと頼みました。久造さんは快く引き受け、仕事をする足場）を作り、鋸の扱い方、腰の構え方など基本指導をしてください。と抱えもある丸太に鋸を入れ、ツッツツツツと挽き乍ら、ハアアと唄い出したその声は、リンとして力強く八十歳でこの声！本物だアと只々圧倒され、よし！俺もこれで行くぞ」と妙な決意をし、ワクワクし乍ら指導を受けました。その後、久造さんと一緒に、NHKテレビの「芸能百選」とか「ふるさとからこんばんわ」に出演し「奥武蔵木挽き唄」として唄わせて頂き、そして久造さんの「木挽魂」のこもった大事な鋸を頂きました。三枚目のこの鋸を持って舞台に立ちますと久造さんの魂がのり移ったような気持ちになりました。さて、この鋸と木挽き唄を誰か引き継いでくれる人が現れないかと待ち望む八十歳です。



NPO法人民謡舞公演実行委員会
理事

龍鳳会 会主 増田龍鳳

両親共に千葉市内出身で千葉から出たことの無い私、が津軽民謡に出逢ったのは二十歳を過ぎた頃でした。

三歳のときに日本舞踊のきらびやかな舞台を観たその日の内に、母に泣いて頼んで日本舞踊を習い始めたのを覚えております。

三歳の子供には「お月様」や「紙人形」などが手始めなのに、お師匠様に「お三味線ものがやりたい」と返したと後々まで母が笑って話しておりました。子供心に三味線の音色が大好きでした。四歳の時には「羽根の禿」で初舞台を踏ませて頂きましたが、高校生の頃にはそれまでの情熱が褪せて、母を喜ばせる為にだけ踊っていたような時期でした。そんな折りに津軽三味線の曲弾きを聴き、鳥肌がたつような衝撃を受けました。一時、本場青森県に単身修行に行くことも考えました。左官業を営んでいた職人気質の父親は、「そんなに、やりたいのなら」としぶしぶながら許してくれましたが、母親が娘一人で行かせるのは、心配だったようで、猛反対され断念しました。東京でも本場仕込みの津軽手踊りの先生がいらっしやると聞き、ご紹介頂いたのが、故二代目尾原家万次郎（増田繁治）さんでした。華やかで躍動感に満ちた踊りに出逢い、それから津軽民舞踊の世界へのめり込みました。ご存知のように津軽手踊りは始めから最後まで踵を床に着けずに舞い踊るのが



原点です。晩年、病に苦しみながらも動
 けなくなるまで爪先で舞台に立ち続けま
 した。
 その、二代目尾原家万次郎こと増田
 繁治が、逝去してから早いもので、今年
 で十一年を迎えますが、未だにその姿は
 鮮やかに浮かびます。
 ある男性舞踊家が、東京に津軽手踊り
 広めた「あの人は、神様だから」と。
 その言葉に居合わせた娘と二人で泣いて
 しまいました。
 二代目尾原家万次郎と結婚し、二人の
 間に生まれた一人娘の衣美は、父と過ご
 した時間は短くても、父親の踊りが心の
 中で力強く輝いているようです。
 勤めとの両立は大変なようで、思っ



ように、稽古も儘ならない日々を送っているようですが、娘には、楽しんで踊っているように、貰えたらと願っております。

ただただ見守ることにかできませんが、将来、あの時にもっとやっておけば良かったのに、とならないように過ごして欲しいと思っております。

先日、古い舞台のビデオを見ておりまして、お立ち酒に合わせて、若い唄声の私が踊っていた後、母親が涙を流した。この舞台が終わった後、母親が涙を流した。母親の気持ちが、胸に甦ります。その時の教えは、支えになっています。

はずが守られていて、気がつかれた。十年で見た。このNPO法人人民謡舞公演実行委員会では、また新たな縁を結ばせて頂いて、感謝しております。

この身が続く限り、縁を大切にしております。もちろん、この前へ進みますが、軽手踊りは、もうこれからは、前へ進みます。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

家族や仲間を支えられて



山根会 会主

山根善童

東西に長い島根県の中央部、日本海に面した大田市五十猛町に、昭和十八年、八人兄弟の八番目として生を受けました。その昔は「石見国」と呼ばれていた地域で、三宅良二さんと同じ島根県、それも石見地方の出身ということで親しくしております。

当時地元では「大森銀山」と呼ばれていた世界遺産「石見銀山」も同じ大田市になります。

昭和三十八年、高校卒業後十九歳の時に上京し、当時亀戸に本社があった総合建設業・大都工業という会社就職し、千葉市の登戸の社員寮に住んでおりました。当時は翌年に東京オリンピックを控えた、高度経済成長の真っ只中で活気がありました。海苔の漁場や漁港があった千葉県内房の沿岸地域が大型コンビナートに生まれ変わる時期で、忙しい毎日で、猛烈社員でした。

その後、埼玉県の蕨市、そして横浜に転勤になり、そこで会社のお客様の紹介で、家内に出会い結婚しました。家内の実家が事業をしていた関係で、務めていた会社を辞め、義実家の家業を手伝うようになり、横浜に居を構えました。その頃、近所で建前・上棟式があり伺う機会がありました。当時は酒がはいると出るのが民謡。佐藤信治さんが唄われ

その時尺八伴奏されていたのが大山巖善さんでした。これが、ご縁で「鳳友会」に入会し尺八をはじめました。二十年前、師匠の大山巖善先生が急逝され、一時、矢下勇蔵先生に師事しました。その後、「鳳友会」の仲間から会を引き継いでくれないか。との要請があり、力不足で当初は辞退しましたが、会員の後押しで、引き継ぐことになり、平成二十四年日本民謡協会神奈川第二連合会入会を機に「山根会」に会名を変えました。あれから十年。昨年十二月には川崎で記念公演を開催することができました。これも、偏に師匠や多くの仲間お陰と感謝しております。民謡・尺八に出会い、師匠や仲間に出会い、幸せな人生です。



平成二十六年第五十四回日本郷土民謡全国大会の尺八グランプリ部門で準大賞を受賞し、長年の民謡尺八活動の中で唯一の賞状とトロフィーで、良き記念となり励みになっています。尺八は奥が深く、いい音色、いい旋律を奏でるのは難しいと感じています。毎日が勉強です。

この春に我が家が大変嬉しいニュースがあり、孫娘の東京大学（理系）が合格です。孫娘の受験の時期に、私が都内の食事に誘ったとき、配をは「コナ」になった。と、心配をかけた。孫の成長を見守ることに、今までの息子の晩酌です。いつも間にか、長年息子の家族仲間を大切にして、民謡・尺八に精進してまいります。どうぞよろしくお願致します。



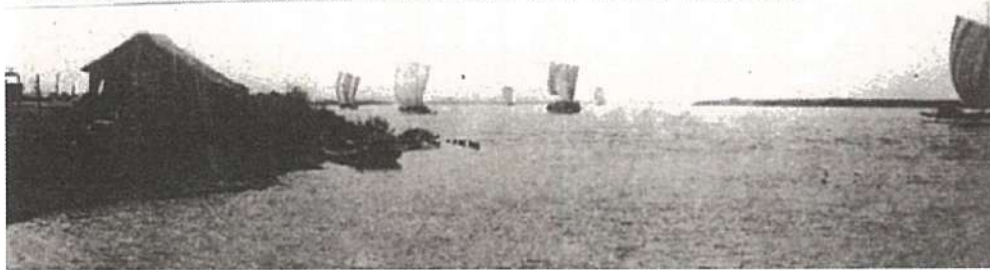
房総のうた つれづれに ③

③江戸川船頭甚句（野田市）

江戸時代後期～明治～大正～昭和初期、江戸川を多くの高瀬舟が上り下りしていた頃、野田市の今上地域の土河岸、下河岸は河岸問屋が立ち並び大変な賑わいを見せていたそうです。野田の醤油をはじめ、水運と結びついて発展していました。江戸の食文化を支え、またその逆に江戸文化を

取り入れそこには日常荷物を積み下ろす船頭達の間から「船頭節」など唄われていたそうです。昭和五十年頃に、この民謡をまとめて頂きたい、という地域住民からの依頼が小生のところであり、「船頭節」を唄いに私の家まで来て下さいました。唄いだしの「ハアー」も、リズムも拍子も曖昧でしたので三味線の手付けを工夫しながら、後世伝えていけるようにと思い、活気のある唄い方に仕上げ、曲名も「江戸川船頭甚句」と改めました。平成六年に財団法人日本民謡協会の発掘新作部門で入選を果たし、この年の全国大会の舞台で踊りを付けて初披露させて頂きました。ハアーエ (コラシヨ) 三十五反の帆を巻き上げて (コラシヨ) 積んで来るとのネ、いとまごえ (ハアコリヤコリヤ) ハアーエ 今上なら受けず義理と

野田梅屋書店発行の絵葉書から野田町附近の江戸川の景 (明治時代)



日本に来て二十七年

朴 俊希

朴俊希 (パクジュンヒ) と申します。韓国ソウルに生まれ、ソウルで韓国民謡のプロ歌手活動をしていました。当時、印刷関係のビジネスでソウルに来ていた主人と出会い、猛烈にアタックされ平成八年に来日し、平成二十年には永住権を取得しました。日本名は佐藤有希です。日本でも群馬県藤岡市の桜山温泉の大衆演劇の一月公演の前座として韓国民謡を披露したこともありました。来日当時は三軒茶屋に住んでおり、主人が仕事に出かけた後は、家事をする毎日。懐かしい韓国の家庭料理が得意で、主人のためだけに作っていました。そこで主人が、この韓国料理をみんなに食べて頂こうと、一念発起して埼玉県滑川町、森林公園駅近くに店舗兼住宅を建て、韓国料理と焼き肉のお店「彩」を開業しました。森林公園駅は東武東上線の始発駅で有楽町線や東横線と相互乗り入れが始まり、座って都心に行けるというところでベッタウンになつていきます。開店当時には近所に3件あった焼き肉屋さんで、コロナ禍や景気の影響で、いつの間にか、今は私どもの「彩」だけになりました。常連さんに恵まれ、営業を続けております。同じ民謡ということで日本の民謡にも挑戦し、現在、小沢千月先生に民謡と民謡三味線全般をご指導頂き、津軽民謡を山本謙司先生に、津軽三味線は佐々木鶴藤先生に教わっています。数々のコンクールに出場していましたが、令和二年、日本民謡プロ協会入会を機に

1. あいや節 (青森県民謡)
2. じょんがら節 (新旧) (青森県民謡)
3. 津軽よされ節 (青森県民謡)
4. 津軽音頭 (青森県民謡)
5. 津軽小原節 (青森県民謡)
6. 磯節 (茨城県民謡)
7. 吾野機織り唄 (埼玉県民謡)
8. 上州田植唄 (群馬県民謡)
9. 隠岐しげさ節 (鳥取県民謡)
10. お立ち酒 (宮城県民謡)
11. 津軽三下がり (青森県民謡)
12. アリラン (韓国民謡)
13. 恨み五百年 (韓国民謡)

23.04.26 © TKCA-75143 © 2023 定価 ¥2,500 (税別 ¥2,273) © 2010.10.25 © 7

Produced by TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS CO. LTD. / MADE IN JAPAN / STEREO

民謡の架け橋

朴俊希 (パクジュンヒ)

民謡の架け橋

TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS

パク・ジュンヒ

朴俊希



コンクールに出場するのを辞めました。コロナ禍の影響もありましたが、コンクールに出ることがなくなり、舞台がなく、困っていたところ、佐々木鶴藤先生に誘われこの会に入会させて頂きました。舞台上に立たせて頂き唄う喜びを感じています。公演ではいつも、お店の開店に間に合うように出演時間を配慮させて頂き感謝しています。

日本に来て二十七年。何か形になるものを作りたいと、漠然と思っていたところ、山本謙司先生から「そろそろCDを作らないか」と、お声をおかけ頂き、先生のお口添えでこの度、日本の民謡と津軽民謡、韓国民謡を収めたCDを徳間ジャパンから出させて頂くことになりました。既に収録やジャケット撮影も終わり、四月二十六日の発売日待つだけになりました。日本の韓国との関係は今、良好なものとは言えないようですが、民謡で両国の架け橋になれるようにとの思いから、今回発売するCDのタイトルは「民謡の架け橋」になりました。ジャケットの写真は少し、キツイように感じられるかもしれませんが、

いたって庶民的な、ただの民謡好き、料理好きだけです。お会いした時には気軽に声を掛けください。お店の定休日の毎週火曜日と月に二度の水曜日は民謡のお稽古。日本の民謡は、やればやるほど難しく感じています。日本の民謡と韓国民謡・それに韓国料理の二刀流ならぬ三刀流で、益々頑張っていきたいと思っています。こちらにお越しの際には、ぜひ焼き肉「彩」にお立ち寄りください。お待ちしております。どうぞよろしくお願い致します。

津軽三味線とフラメンコギターの二刀流で頑張っています 栗原武啓

津軽三味線と、フラメンコギター奏者として活動しています栗原武啓（くりはら たけひろ）と申します。

津軽三味線は父親の影響で幼稚園の頃から、フラメンコギターは十二歳の頃より趣味で始めました。どちらもプロになる気などはなく趣味で続けていました。が、二十九歳の時に勤めてた会社が傾き、そこがターニングポイントになり、プロ活動に段々と傾倒していくようになり、現在に至っています。

独学が長かった私にとって、出会ったたくさんの方々からご教授頂き一生勉強だと思っております。現在、津軽三味線は木乃下真市先生にお稽古を付けて頂き技術を深めております。

津軽三味線奏者、フラメンコギタリストとして、それぞれの歴史を少し紐解いてみたいと思います。フラメンコの歴史と日本の民謡の歴史

で、私が感じることはとても似てると言う事です。どちらも民族音楽ですが、当然似る部分はあると思うのですが、まずは津軽三味線に関してはおおよそ五十年前から、フラメンコも現在の形になってからは同じくらいの歴史のようです。インドから現在のロマ民族（ジプシー）が西へ移動しながら生活し、その土地土地の音楽と交わり新しい音楽が生まれていく。それがベリダン・スになったり東ヨーロッパ、エジプト、ロシアのジプシー音楽になり、西の果てのスペインでは元々のスペイン民謡と交わりフラメンコになりました。その唄は労働歌が多く見られます。ロマの人達はその土地で迫害され差別された歴史があるようです。

一方、日本の坊様と呼ばれてた津軽三味線の伝承者達も迫害された歴史があるようです。江戸時代に、盲目の人達で運営されてた当座が、明治維新以降解体され、投げ出された盲目の人達は生きていく為に門付けをやらざるをえなかった。

ロマの人達もパジョと呼ばれるロマの血を引かない純粋なスペイン人の人達から軽蔑、迫害などがあつたようです。その中でお金持ちに気に入られて家に呼ばれて演奏などをして生活を繋いでいたようです。ここまで見ただけでも非常に似ているように思います。

そして音楽としての成り立ちも似ています。津軽民謡は何といってもまず、歌い手が主役。三味線弾きは地方（じかた）として盛り上げる役目、フラメンコも同じです。まずはカンテ（唄）と呼ばれる人が主役です。その伴奏をする



のがギタリスト。そのカントの唄声を観衆達は聞きたいんです。そして、津軽手踊り、フラメンコ、どちらも踊り手が存在して華やかに観客を魅了する。やはり似ているようです。

さて日本にフラメンコはいつ入ってきたのか。約百年前、昭和初期の頃のようにです。

日本の民謡では、昭和六年、初代函青くに子が塩釜小原節で日本中を沸かせ、津軽三味線では初代白川軍八郎が活躍していた時期です。その頃、フラメンコが日本にやってきました。

その当時、海外に行くのはまだまだ大変な時期です。

私の先輩方に聞いた話では、貨物船の安いチケットで一か月かけてスペインに渡り、帰れるかも分からない中、勉強していたそうです。日本にいる家族が何年も連絡が取れないから死んでるかもと、スペインの日本大使館に息子を探させた、などの話も聞いたことがあります。フラメンコに魅了されたからでしょうか。みんな命がけです。命がけで習得した音・音楽だからこそ、人の心に伝わるのだと思います。

津軽三味線の坊様達と同じです。

その日生きるか死ぬかの中で、門付けをして暮らしていた。今の僕達には想像すら出来ない過酷な人生だったと思います。

そんな風に現在に伝わってきた両方の音楽に私は携わっていると云う事を再認識し、精進して今後の音楽人生を送りたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

コンクールの思い出

NPO法人民謡民舞公演実行委員会

理事長 三宅良二

二十一歳で上京して、二十代は平日は会社勤め、土曜日曜は民謡、特にコンクールに挑戦していました。まだ土曜日はお休みになっていませんでしたので、有給休暇をほぼ全部消化していました。

初めて挑戦したのは当時GWに開催されていた「尾鷲節全国大会」。入社した会社の本社が愛知県大府市にあり、二か月の間の新人研修の時、新聞で大会のことを知り三重県尾鷲市に行きました。尾鷲節は唄ったことは、あまりありませんでしたが、「まあ、なんとかなるだろうダメもとで」。が、運よく予選も通過して翌日の決勝へ。結果は四位だったか、と記憶しています。そこでお知り合いになった方のお住まいが、大府市の隣の豊明市で、週末によく遊びに伺い、ずうずうしく泊めても頂きました。研修が終わり上京するという時に、「弟が横浜で民謡の先生をしているので、良かつたら行ってみないか」と言われ、上京後伺ったのが木津竹嶺先生でした。木津先生には熱心にご指導頂き、大変お世話になりました。

何しろ二十代は可能な限りコンクールに挑戦したと、記憶しています。挑戦した大会は「津軽五大民謡」「南部牛追唄」「生保内節」「秋田おぼこ節」「本庄追分」「岩室甚句」「八木節」

「ちゃつきり節」「相馬民謡」「最上川舟唄」「秋の山唄」「お立ち酒」等々。結果に対しては嬉しかったり、悔しかったりしましたが、参加されている方との出会いや、地元の方の暖かい人情にふれることのできた、私にとって貴重な経験でした。

どの大会もそうですが、旅館も予約せず、勤めが終わった週末の金曜日の深夜に一人で夜行バスに乗って行っていました。

「南部牛追唄全国大会」
毎年九月の最後の土日に、岩手県岩泉町で開催されるこの大会には、六回挑戦しました。毎回地元の方の家に泊めて頂き、旅館に泊まったことがありませんでした。もちろん生まれて初めて行ったところで、知り合いもいません。京都から帰省がてら参加されていた砂川さんに声を掛けて頂き、

「今日の宿は決まってるの」
「いえ、これから探そうかと」
「ならうちにとまったら」
「いいんですか。よろしくお願いします」と、泊めて頂きました。そのお宅は会場から車で二時間は掛かる青森県境の九戸郡山形村。どんな家だったか想い出せません。そのはずです。予選が終わり山形村に着いたのが九時近く、翌日も六時過ぎに出発。ただ、初めて聴く親父さんの東北弁が全く分からなかったことを覚えていています。ニコニコ笑って話しかけて頂いていました。

その大会で知り合い、友人になった佐々木純さんの実家にも泊めて頂きました。

おぼない 第6回 生保内節全国大会

と き 平成3年9月22日(日)・23日(祝)
と ころ 田沢湖町町民会館



「相馬民謡全国大会」
運よく決勝に残り、いつものようにスーツで参加していた私に「明日はテレビだから、私の紋付を貸してあげるから着て出なさい」と地元の阿部市郎先生から、声を掛けて頂き、当時一人では着物が着ることが出来ない私に、着せて頂きました。

「お立ち酒全国大会」
宮城県大和町(たいわちよう)で開催され、大会も終わり帰ろうとした時に、二日間顔を合わせ、親しくなった村上さんと言う方が、「三宅さん、仙台まで行くのなら、幸ちゃんに乗せてもらいなさい」と。お言葉に甘えて乗せて頂いたのが、白井幸子さんでした。仙台駅までのくらい掛かったのか。緊張したことを覚えています。

「三宅さん 良く会うわね。頑張っ

第7回 生保内節全国大会

と き 平成4年9月22日(火)・23日(祝)
と ころ 田沢湖町町民会館



ね」と審査員をされていた斎藤京子先生に声を掛けて頂いたこともありました。

当時、コンクールに良く出ていたもので、いつか自分でも「コンクール」をやってみたいと思っていました。昨年はコロナもあり、開催を断念しましたが、今回、運よく会場が確保できましたので、もう一度挑戦し、皆さんに、いい思い出を作ってもらえるような大会になるよう準備を進めています。何卒ご協力下さいませようお願いします。ぜひコンクールにご出場下さい。

「生保内節全国大会のプログラム大切に保管して頂きました。表紙の写真は前年度、決勝に進んだ方々です。」わかりますか？

◆出場者 大募集

千葉の民謡を唄おう

「民謡日本一選手権」

日時 8月6日開催

会場 プラッツ習志野 市民ホール

◆「千葉の民謡の部」

◆「全国の民謡の部」

趣旨

民謡を通じて郷土文化、地元産業を広く全国に知らしめ、合わせて地域社会の福祉及び情操教育の向上に寄与することを目的とします。

出場資格

民謡愛好家ならどなたでも出場できます。

演奏時間

二分程度

募集人員 合わせて二百曲

出場申込料 一部門の場合は五千円。

両方の部門にエントリーできます。その場合九千円。

表彰

優勝 習志野市長杯（申請中） 賞状
各部門優勝盾、賞状
各部門二位—十位 賞状
決勝進出者 記念メダル

副賞

千葉県産お米

同封の申込書にて申し込み下さい。
宜しくお願いいたします。

◆伊勢神宮外宮

奉納芸能参加者募集

年に一度、親睦旅行を計画しており今年度は以前より一生に一度は行ってみたいと思っております。伊勢神宮「外宮」の奉納芸能を十一月に予定しております。年初より申請しておりますが、申請書類（具体的な出演者名、演目曲目、衣装等の資料）が不完全なため、残念ながらまだ受理されておりません。

つきまして、参加しようと思われる方◆プロフィール、◆曲目・演目、◆衣装の写真、を、お手数ですがお送りください。申し込みますようお願い致します。参加費用は二泊三日で（旅費・宿泊費・初穂料）十三万～十五万円程度になる見込みです。



◆令和六年度 「春の華まつり」

日程 四月十四日

会場 カメリアホール

会場確保にご協力頂き、来年度の「春の華まつり」の日程・会場が決まりました。有難う御座いました。詳細は後日改めてご案内させていただきます。ご予約下さいますようお願い致します。

編集後記

ついこの間、年が明けたと思っておりましたが、早くも四月。侍ジャパン世界一のWBCでは、にわか野球ファンになり、いよいよシーズンが始まり、連日大谷選手の活躍を観戦しています。

不定期で年に二三回程度発行しています「会報」今号四号にも寄稿下さいまして有難うございました。この場をお借りしまして御礼申し上げます。ワードとエクセルと糊とハサミと印刷はコピーで作成していた物から、印刷に変えて二度目。写真を多めに取り入れ作成しました。充分に注意したつもりですが、誤字脱字等がありましたらお許し下さい。

次号は今秋を予定しております。テーマは何でも結構です。民謡に、いつでもでも結構です。民謡以外の事でも大歓迎です。我が人生、昔話、将来の夢、最近の出来事、等々寄稿下さいますようお願い致します。お待ちしております。

昨年は会場確保の難しさを感じておりましたが、ご協力いただき来春の会場確保できました。有難うございました。引き続きご協力下さいますようお願い致します。

満開の桜も葉桜に変わり、新緑の色ます季節になりました。日に日に日差しが強くなってきました。どうぞご自愛ください。

千葉の民謡を唄おう

千葉は民謡の宝庫

民謡日本一選手権

「千葉の民謡の部」

「全国の民謡の部」

東京のとなりの千葉には、都会的な

雰囲気と四季折々の風光明媚な

大自然があります。海あり川あり、

田畑あり、南国情緒あり。

酒造りや、醤油造り、歴史ある産業が

あります。人情があります。

海の唄、大漁の唄、川の唄。

力強い唄、粹な唄、のどかな唄

先人たちのお陰で、数多くの

民謡が残されています。

千葉は民謡の宝庫です。

千葉の民謡を唄おう。

千葉の民謡を唄い継ごう。

8月6日

入場無料

開場／9：30 開演／10：00

会場／プラッツ習志野市民ホール

習志野市本大久保3-8-19 京成大久保駅徒歩1分

主催：特定非営利活動法人 民謡民舞公演実行委員会

共催：習志野市民謡民舞連盟

後援：習志野市 公益財団法人日本民謡協会 一般財団法人日本郷土民謡協会

株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ 習志野市教育委員会 産経新聞社千葉総局

公益財団法人千葉県文化振興財団 読売新聞千葉支局 東京新聞千葉支局

公益財団法人千葉市文化振興財団 千葉日報社 毎日新聞社千葉支局 朝日新聞千葉総局

【問合せ先】 TEL090-9828-0648 FAX043-310-6175 Email : oshami-miyake@outlook.jp